

Abstracts in Japanese : 日本語要約

裁定役としての子どもの第2言語学習者

ボニー・D・シュウォルツ (ハワイ大学マノア校)

本論文は、(4歳から7歳の間に目標言語に接し始めた)子どもによる母語以外の言語習得の研究が、母語(第1言語、L1)獲得理論と母語以外の言語(第2言語、L2)獲得理論に対して情報を提供する一まさに、理論の可否を裁定する一(特権ある)立場にあるということ提言する。子どもの第2言語データとおとなの第2言語データ、及び子どもの第2言語データと子どもの第1言語データを比較することにより、各々おとなの第2言語獲得及び第1言語獲得に関する私たちの理解がより深まる可能性がある。なぜなら、子どもの第2言語学習者は、当然子どもの第1言語学習者に固有の特質とおとなの第2言語学習者に固有のその他の特質をもつからである。例えば、子どもの第2言語学習者は結局子どもである一方で、おとなの第2言語学習者と同様に既に確立した文法を有している。ここで探求する理論的問題は、「言語的成熟 (linguistic maturation)」が第1言語発達を説明するという仮説と、普遍文法(Universal Grammar, UG)がおとなの第2言語獲得を制約するという仮説である。それぞれの場合において、比較上の類似点と相違点が何を意味するか、その論理を提示する。その後、実証的研究から例を挙げ比較する。

(pp. 1-30)

言語使用に基盤を置く言語獲得モデルについての覚え書き

大津 由紀雄 (慶応義塾大学)

この覚え書きでは Michael Tomasello らによって提唱されている「言語使用に基盤を置く言語獲得モデル(Usage-Based Model of Language Acquisition)」を取り上げる。Tomasello らは子どもの発話および理解に関するデータから、言語獲得は語彙項目ごとに進んでいくものであることを明らかにし、それが普遍文法(Universal Grammar)を基盤とする言語獲得モデルの予測するところと相容れないという主張をしている。この覚え書きではその主張が妥当でないことを論じる。

(pp. 31-32)

日本語と英語の動詞の処理に対する二重処理モデル

玉岡 賀津雄 (広島大学留学生センター)

本シンポジウムでは、英語の形態素処理の先行研究を紹介し、さらに最近の日本語の研究について説明した。日本語は膠着語に分類され、意味を持つ語幹に機能語や接辞をつけて名詞の格や動詞の法・時制などさまざまな文法範疇を表わすことができる。そこで、Sakai, Tamaoka, Kawahara, Fujiki and Fukuda (2004)では、他動詞「壊す」(Vstem+Suffix-u)に対して可能動詞「壊せる」(Vstem+Suffix-eru)という規則的な変化のペアと、他動詞「壊す」に対して自動詞「壊れる」という自動・他動交替のペアを作成してプライム効果を比較した。プライム刺激は可能動詞条件、自動詞条件、ホワイトノイズ条件の3条件で音声提示した。ターゲット刺激は常に他動詞を視覚提示し、語彙性判断課題を課した。その結果、可能動詞条件で、反応時間および誤答率に促進的なプライム効果がみられた。しかし、自動詞条件では、プライム効果はみられなかった。自動・他動交替条件でプライム効果がみられないことは、両者が別々の語彙項目として記憶されていることを示唆している。一方、他動詞と可能動詞についてプライム効果がみられたことは、両者が同じ語彙項目で繋がっており、接辞の付加で他動詞と可能動詞が連続的に生成されていることを示していると思われる。つまり、「単語とルールの理論」あるいは規則(ルール適用)と不規則(単語記憶)の「二重処理モデル」が機能していると考えられる。

(pp. 35-43)

単語分節化のコネクショニストモデル

牧岡 省吾 (大阪府立大学)

コネクショニストモデルは、言語が脳内でどのように表現されているのかを検討する上で有効なツールである。本論文では、コネクショニストモデルの基本的枠組みについて解説し、これまでに提案された言語に関するコネクショニストモデルの問題点について検討した。さらに、母語の獲得過程について検討するために、切れ目のない音素系列から単語を分節化するコネクショニストモデルを構築した。このモデルは、教師なし学習によって単語の内部表現を自律的に生成することができる。CHILDES(MacWhinney, 2000)に収録された養育者から子どもへの発話から訓練パターンを作製し、学習を行なわせた結果、従来のモデルと比べて良好な単語の分節化成績が得られた。また、般化成績も良好であった。

(pp. 45-56)

幼児と大人が事物の部分名称を学習する際に、教示者が事物の部分に触れることの効果

小林 春美 (東京電機大学)

本研究は子どもがなじみのない事物の新奇な部分名称を学ぶ際に、おとなが事物の部分に触れながら指さしをする(「接触指さし」)ことの効果を調べた。参加者は2歳児、4歳児、と大人であった。実験1では、実験者はなじみのない事物の一部に対し、接触指さしを行い命名しかつ動作を行うか、あるいは接触指さしと命名だけを行い、28人の日本人4歳児に、新奇な部分名称と部分とを結びつけるか尋ねた。実験2では、30人の2歳児、31人の4歳児、30人の大人に対し、実験者が接触指さしを行うあるいは部分から7cm離れたところから指さしを行うか以外は、実験1と同様の実験を行った。これらの実験の結果、4歳児は接触指さしが行われるとより多く部分名称を学ぶこと、4歳児の反応パターンは大人のパターンに似ていることが示された。事物の部分に接触することを解釈する能力は、2歳から4歳の間に発達するらしいことがわかった。大人による部分への接触指さしは、部分名称を学ぶ際の有用な手がかりでありうる。(pp. 61-76)

日本語児の対格「を」と格助詞省略の獲得：「を」の獲得に向かう発達段階

岩崎 典子 (カリフォルニア大学デービス校)

本研究では、日本語を母語とする2-3歳児の格助詞「を」と格助詞省略に関する理解を二つの実験を通して検証した。実験1では、疑問詞「だれ」を含む疑問文を用いて格助詞「が」「を」と格助詞の省略(以下「Ø」)の理解を、さらにYes/No疑問文を用いて「が」「を」の理解を調査した。その結果、2-3歳児の多くが「を」も「を」の省略とされる「Ø」も動作主と解釈する傾向があり、必ずしも2-3歳児が格助詞省略の文法的制約の知識を獲得しているわけではないことが明らかになった。その一方、「を」を被動作主と正しく解釈した子どもは、「Ø」も被動作主と解釈することで、格助詞省略の文法的制約の知識を獲得しているようであった。実験2では、格助詞「が」「を」と省略「Ø」に加えて造語助詞「ウ」を用い、「Ø」の正しい理解(格助詞の省略の文法的制約の知識)が対格「を」の獲得に伴うものなのか、あるいは、対格「を」を完全に獲得できていない段階で他動詞と共に「が」以外の標識を被動作主と解釈し始めるのかを検証した。その結果、「を」と「Ø」を被動作主と解釈す

る子どもたちが造語「ウ」も被動作主と解釈することから、形態格「を」の正確な獲得の前に、助詞が文法関係を表示することの理解、および格助詞省略の文法的制約の知識の獲得によって既に獲得している「が」以外の標識を被動作主と判断する発達段階があることがわかった。(pp. 77-94)

高等教育における外国語学習者(スペイン語、フランス語、ドイツ語、日本語)の動機づけについての比較研究

加藤 富美江 (ノースキャロライナ州立大学シャーロット校)

本稿は、ノースキャロライナ州立大学シャーロット校において、スペイン語、フランス語、ドイツ語、日本語を外国語として学習している学生(1,193人)の動機づけの高さを調査した。その比較研究の結果を報告するものである。特に、次の2項目について焦点をしばってみた：どのコース(初級、中級、又は上級)で学習している学生が高い動機を有しているか、また、上記の4種類の外国語学習者間では、どの外国語学習者の動機が高いかという2点である。本研究では、日本語学習者以外では、上級で学んでいる学生が、初級、中級コースで学んでいる学生に比べて最も動機づけが高いことが分かった。日本語学習者の動機づけの高さについては、3コースレベル間では著しい違いは見つからなかったものの、4外国語学習者間での比較においては、日本語学習者が最も高い動機を有していることが分かった。(pp. 97-112)

ネイティブ・スピーカーが最適な語学教師であるという考えと結びつく要因：日本の小学校教師の場合

バトラー後藤裕子 (ペンシルバニア大学教育学大学院)

語学教師には、該当言語のネイティブ・スピーカーが最適であるとする考え方は、教師をはじめ一般の間で大きな影響力を持ってきたといわれる。しかしその妥当性を疑問視する研究者も多い。本研究は、東アジアの英語教育者の間で、英語のネイティブ・スピーカーが最適の語学教師だとする考え方には、どのような心理的要因が結びついているのかを見出すことを目的とする。ここでは、近年、英語活動を行い始めた日本の小学校教師の間でのケースを扱った。112名の小学校教師から得た無記名調査票の結果を分析したところ、(1)教師の自己評価による英語力、(2)非標準英語に対する態度、(3)日本語または日本文化に対する誇り、の3つの要因が浮かび上がった。(pp. 113-129)

学習者中心の授業における活動の移行、言語切り換えのケースを含めて

エリック・ハウザー (電気通信大学)

本稿は、ある日本の大学における学習者中心の英語授業において、ある活動から他の活動への移行が、いかに学習者に依存し、また、いかに学習者自身によって構築されていくかを会話分析的な手法を用いて調査したものである。データは、学生4人からなるディスカッショングループの対照グループを録画したものである。分析方法は、学習者中心のグループ・ディスカッションから教師主導によるクラス全体のディスカッションへ移行する際に観察される連続的な構造に焦点を当てるものである。分析の焦点は、移行がどのようなことを契機として協力的に開始されるか、(移行)直前の活動が「終了したもの」と「コメント可能」に区分けされるか、また、学習者間の役割分担がどのように行なわれているかに置かれる。移行の分析により、学習者は外国語学習の授業を、「別個の活動が順序よく連続的に展開していく制度化した場」ととらえていることが明らかになる。次に、調査の関心は移行の際に生起する言語の切り替えの分析に向けられる。この分析は、言語切り替えがもたらす学習者間の相互行為的なやりとりの考察につながるとともに、言語切り替えそのものが相互行為的なやりとりの契機になりうるものであることを明らかにする。(pp. 131-144)

外国語として学習した英語の喪失と保持の要因：日本人の成人学習者

山本 貴美枝 (ハワイ大学マノア校)

本研究は、英語を外国語として学習した日本人の成人を対象に、日本語(第一言語)という言語環境下における英語の喪失と保持の要因およびその寄与率の特定を試みたものである。東京の某私立大学の卒業生20名(男子4名;女子16名)からデータを収集した。いずれも同大学在学中、2年間の英語教育プログラム(英語で行われる授業)を修了し、大学卒業後5、6年になる27~30歳の日本語母語話者である。「帰国生」「留学経験」「大学の英語教育プログラムの成績の平均」「卒業後の英語使用」の4つの独立変数で重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。その結果、「卒業後の英語使用」「大学の英語教育プログラムの成績の平均」「留学経験」の3つが統計的に有意な独立変数として選ばれ、大学卒業後の英語力の変動全体の65.8%を説明するものとなった。また、EFL環境下で「卒業後の英語使用」が

大学の英語教育プログラム修了後の英語力の予測に最も寄与する変数であることが判明した。(pp. 145-162)

英語単語認識における音声の影響：中級レベルの日本人英語学習者の場合

ジェフリー・ウィッツェル (アリゾナ大学)
ウィッツェル楠緒子 (アリゾナ大学)

本研究は、4年間の英語学習経験を持つ日本人英語学習者が第二言語である英語の単語を認識する際に、その英単語を音声化するかどうか、また音声化する場合はどの程度その音声に頼るのかを調べた。具体的には、2つの実験、単語判断タスク(実験1)と文検証タスク(実験2)を行った。両実験とも被験者がどれだけ第二言語の単語の音声に敏感かを計れるような実験項目を用いた。実験1では同音異義語と同音異義語に似せた非語を実験項目として使った。実験2では正しい同音異義語を用いた文と正しくない同音異義語を用いた文と同音異義語に見た目が似た単語を用いた文を使った。両実験とも音による(強い)影響は見られなかった。この2つの実験の結果から、上級レベルの日本人英語学習者と違い、中級レベルの日本人英語学習者は第二言語で読む際に音声に頼らないと結論付けられる。(pp. 163-178)

物語構築における視点の置き方に関する考察：日本語母語話者と上級日本語学習者について

中浜 優子 (東京外国語大学)
栗原 由華 (浜松市立細江中学校)

従来、視点を表す言語形式として授受表現やヴォイスに考察が限られてきた。本稿ではこの2つの構文的手がかり以外に、視点に関連すると思われる移動動詞、主観表現、準感情表現、感情表現の4項目を加え、特に視点の中でも「登場人物のうち誰と同じ位置に立つか」を意味する「視座」に着目し、従来よりも広いアングルから視座を見直した。日本語と中国語では、日本語が視点を主人公に絞り話をするのに対し、中国語は主人公に視点を絞らず中立視座に立ち主人公以外の人物の視座からも物語を構築する傾向にあるということが先行研究より明らかになっている。こうした先行研究結果を踏まえ、日本語母語話者(39名)と中国語を母語とする日本語上級学習者(10名)の物語構築における視座の置き方を検証した。登場人物

が2人の5コマ漫画を見ながらストーリーを記述してもらい、分析した結果、以下のことが分かった。日本語母語話者が同一局面において、1人の人物に視座を置いたのに対し、中国語を母語とする学習者の記述では、談話の焦点がその2人の登場人物間を行き来する傾向が顕著であった。さらに、手がかりの産出の傾向を局面ごとに見たところ、母語話者と学習者グループでは、差異が見られた。日本語母語話者は1～4コマ目で授受表現、移動動詞、ヴォイス等を多く産出し、最重要シーンである5コマ目で内面描写である主観、感情表現を多用することにより話の臨場感を出していた。これに対し、学習者の記述では感情表現の100%が1～4コマ目で使用されながらも、主観表現の使用は5コマ目に限られたりと、内面描写を表す表現が物語全体に混在しているのが分かった。また日本語学習者へのインタビューにより、中国語と日本語での視座の置き方の違いなどの理解が欠けていることも明らかになった。今後の課題としては、日本語学習者の被験者数の増加、中国語以外の母語を持つ日本語学習者の調査などが挙げられる。(pp. 179-194)

第2言語習得における韻律的強調を伴うリキャストの効果

成田律子 (マカレスター大学)

近年、第2言語習得の分野において、非明示的ネガティブフィードバックであるリキャストの効果は外国語教育に効果的であることが検証されてきた。しかし、リキャストは学習者に明示的に間違いを指摘せず、すでに正しいインプットを与えているので、学習者が自らその正しいインプットに意識的に気付くことが困難かもしれない。そこで、本研究では、韻律的強調を伴うリキャストの方が普通のリキャストと比べ、第2言語習得により効果的であるかを調査した。ここで、韻律的強調を伴うリキャストとは、学習者の間違いを上昇イントネーションで繰り返し、それにあたる箇所を強調して、正しいインプットを与える非明示的ネガティブフィードバックを指し、普通のリキャストとは、学習者の間違いを単に正しく言い直した非明示的ネガティブフィードバックを意味する。Ishida(2004)の調査方法を基に、被験者と日本語母国語話者(筆者)との1対1セッションを用い、被験者には、2人の学習者に協力してもらい、二ヶ月間で8回のセッションを実施した。1人には、「ている」の誤りに韻律的強調のリキャストを、助詞「に」の誤りに普通のリキャストを与え、もう1人にはその反対のフィードバックを与えた。学習者の発話を比較した結果、普通のリキャストより韻律的強調リキャストを受けた後の方が、本研究の対象の文法項目の習得がより伸びていることが判明した。その正確さはインストラクションセッション

後も維持されていた。韻律的強調リキャストを受けることにより、学習者は自分の間違いと日本語母語話者の正しいインプットのギャップに気づき、その違いを認識し、それが最終的に文法の習得につながったものと思われる。(pp. 195-211)

話者の発話運用の差異の分析によるタスク難易度の判定

武井 直紀 (東京工業大学)
赤堀 侃司 (東京工業大学)

本研究の目的はタスク難易度の判定にあたって、話者の発話運用の状態に主成分分析を適用することにより、客観的に判定を行う方法を示すことである。理論的な分析から、あるタスクを実行する際の、言語運用能力の異なる話者群の間の発話運用の状態の差異が大きければ大きいほど、タスク難易度が高いと考えられる。実験では17名の日本語の母語話者と、38名の上級レベルと中級レベルの日本語学習者を被験者とし、3つの異なった種類のタスクが課された。それぞれのタスクごとに、話者群別の、5つの変数で代表される発話運用の状態が記録され、主成分分析により分析された。その第一主成分の主成分得点の比較から、意見を述べるタスクが最も難しく、次いで小説や映画のストーリーを説明するタスク、最も易しいのが日常生活の叙述のタスクと判定された。この順位はACTFLのOPIや、経験ある教師による主観的分析の結果と基本的に一致し、このタスク難易度の方法が有効であることが示された。(pp. 213-226)

東カタロニア地方の母音弱化的特徴：中央化ではなく上昇化

ディラン・ヘリック (オクラホマ大学)

本稿は、スペインの北東部カタロニア自治区で話されているロマンス系の言語、すなわちカタロニア東部の五つの方言における母音弱化的定量的な研究である。この五つの方言それぞれに対し、(a)文献で報告されている特徴づけを検証し、(b)強勢と非強勢の両方の母音目録に対する定量的な音韻データを与え、(c)カタロニア地方の母音弱化的中央化(つまり第一フォルマントF1と第二フォルマントF2の両方の弱化的)ではなく、(第一フォルマントF1の)上昇化によって主に特徴付けられることを示す。(pp. 229-243)

極小主義移動理論における日本語かき混ぜに対するひとつの大胆なアプローチ

内芝 慎也 (無所属)

日本語のかき混ぜは、これまで NP 移動や WH 移動とは異なった方法で扱われてきた。本論では、生成文法の極小主義モデルの枠組み(Chomsky, 2000, 2001, 2004)を採用し、日本語のかき混ぜを現在考えられている一般移動理論に統合する可能性を探る。論じるのは、日本語のかき混ぜは Agree を前提とする EPP 駆動の移動であるということで、この主張は主要部移動はその主要部が既に参入している Agree の関係を移動先に伝達する(Agree-Transmission)という本論の中心的な提案に基づいて行われる。この日本語かき混ぜに対するアプローチで次の3点が説明されることを示す。(i)かき混ぜ文と非かき混ぜ文における量化主語の解釈上の対比、(ii)束縛関係の派生的モデルを用いた日本語かき混ぜの再構築効果、(iii)英語に日本語のようなかき混ぜが存在しない理由。(pp. 245-260)

文脈に即した名詞句の意味解釈の検討

菊池 隆典 (中京大学大学院)
白井 英俊 (中京大学)

本研究では、日本語の「NP1 の NP2」(NP1, NP2 はそれぞれ名詞句)という形式の名詞句(以下、「NP1 の NP2」と呼ぶ)を取り上げ、文脈に基づいて最も妥当な解釈を得るための手法を提案し、その有効性を示す。一般に「NP1 の NP2」は、NP1, NP2 および文脈によって様々な解釈が可能である。過去の研究において「NP1 の NP2」の様々な解釈方法が提案されているが、文脈を考慮した解釈を扱ったものは無かった。本稿で提案する手法は、名詞句「NP1 の NP2」の意味表示の構築、談話情報の構造化、構造化された談話情報のうちから文脈に最も妥当なものを決定するという段階からなる。語彙情報としては、生成語彙論(Pustejovsky, 1995)が提案するような「慣習化された世界知識」までも言語的知識として記述することを仮定する。談話情報を表わす枠組みには分節化談話表示理論(以下、SDRT)(Asher & Lascarides, 2003)を採用する。談話情報は、先行文脈が記述する命題、命題間に成立する修辭関係により階層的に構造化される。入力文に含まれる「NP1 の NP2」の解釈は、語彙情報と談話情報により解釈の範囲が制限され、そのうちで文脈に最も妥当な解釈が談話結束性最大化原理と呼ばれる原理によって決定される。本稿では、まず具体的な例文の解釈過程を追い、提案手法によ

り母語話者と同様の解釈を得ることが可能であることを示す。続いて、新聞記事に出現した「NP1 の NP2」に対して提案手法を適用することで、その有効性を検証する。本稿で提案する手法は「NP1 の NP2」の解釈のみならず、一般の名詞句や英語の属格表現などにおいても文脈に即した解釈を得るために有効な手法であると考えられる。(pp. 261-278)

要求を表す非言語表現に対する応答の研究

鈴木 美紀子 (コロンビア大学ティーチャーズカレッジ)

本研究では、要求を表す非言語表現に対する応答を、語用論の分野における依頼の言語行為、礼節、語用転移等の面から分析した。人が言葉を用いずに要求を表現する4つの場面を想定し、談話応答穴埋めテストにて日本人・米国人被験者の反応を調べた。被験者は3つのグループに分けられ、11人の日本人が日本語版のテストに日本語で回答し、他の11人の日本人が英語版テストに英語で回答し、11人の米国人が英語版テストに回答した。被験者の回答は4つの礼節レベルに仕分けられた。分析の結果、1)4つの場面において3つのグループの間で応答のタイプが違うこと、2)米国人の応答には負の礼節が見られ、日本人の応答には正の礼節が見られること、3)二言語間での顕著な語用転移は見られなかったこと、の3点を確認した。(pp. 279-294)

他者性のアイデンティティ構築：会話分析アプローチ

ジーマーマン エリカ (米国海軍兵学校)

多くの第二言語/外国語としての日本語の研究者は対話者の適切なアイデンティティは非母語話者か学習者であるという前提の下にアイデンティティの研究をおこなってきた。本研究は、会話分析(Conversation Analysis)のアプローチを用いて、参加者がどのようにアイデンティティに適応しているのかを電話における会話のデータを使って分析した。会話の中で参加者の名前が述べられる時、アイデンティティが起こり、「他者性」のアイデンティティを構築することが明らかになった。(pp. 295-311)

